

〈書評〉

野村敏夫著

『言葉と心が響き合う表現指導』

―主体交響の国語教育―

山下 勇 人

著者の野村氏は、かつて都立高等学校の国語教師であったが、その時、クラス担任となつて一つの学年集団を三年間指導し、国語の授業においても、主としてその学年の生徒達を担当した。この書は、その三年間の国語の授業記録と、その授業実践を貫いているところの、生徒達の相互交流をめざす表現指導の考えが記されている。

本書には、短歌・俳句・詩、感想文、スピーチ原稿、語の説明などの生徒作品が、一年から三年までの学年ごとに数多く収録されており、その作品に対して、著者が作者の紹介を行い、作品の感想を述べている。生活指導が大変な生徒達を対象にして、教師という職業に付属する感傷性をも包含して、学年の教師達が一丸となつて指導に取り組む様子がわかる書であり、生徒達に対する著者の愛情が伝わってくる書である。

国語の授業において、さまざまな表現活動を通して生徒達が互いに相手のことを知り合つて交流を深め、個人の「単独性」を大切にしながらも互いに成長していく授業を、著者がめざしたことが分かる。教師の一方的な知識伝達の授業ではなく、生徒の活動

を主体にした授業計画を構想したことが分かる。

生徒達を交流させる「表現」の指導は、その一部を示すと次のようなものである。

一 学年においては、生徒作品「これまでのこと」を読んだの感想を書く、そして「私のこれまでのこと」を書く、一分間スピーチの原稿を用意し、各自スピーチを行う、「学科試験による大学受験」や「バイク三ない運動」を巡つての討議をして意見文を書く、短歌の創作を行うなどである。

二 学年においては、「隠喩」の創作や、体育祭や遠足における短歌の創作を行う、自分を何かに置き換えた表現を行う、「レトリック感覚」を身に付けるため、新聞投書を分析し自分の意見文を書く、班ごとの意見発表や討議を経ての自分の意見文を再考する、スキー修学旅行を詠んだ短歌を創作するなどが行われた。

三 学年においては、短歌・俳句の創作や、橋本治の「言語学演習」をもとにしての語の意味説明を行う、「藤野先生」を読んだの感想文を書く、卒業文集のための短歌創作を行うなどの活動が行われた。

本書の優れている点は、一つの学年の生徒達に対して三年間、国語の授業を持ち上がって担当し（なるべく多くの教師が担当するほうがよいという意見もあろうが、「表現」活動を活発化させた、その指導例が示されていることである。国語の授業のみならず、学年の行事などにおいても、生徒達が心を開いて自分を「表現」させるようにしたい、「表現」活動を通して、生徒同士や生徒と教師との交流を図りたい、との著者の願いが構想化・具現化

されている。三年間の授業計画を、指導の過程の中で構想しているのはなかなか容易ではない。この構想に基づいてさまざまな表現の工夫がなされている。

この書を読んで目を覚まさせられるのは、一つの学校の高校生ということで括れない、多様な生徒の、言語認識や言語思考の活動が見られることである。

「学科試験のみによる大学入学試験」を討議する学習では、その賛成派となった生徒達の主張（五六ページ）から、彼らが実に論理的によく考えていることがわかった。具体的に切実な問題に向き合って、きちんとした理由を考えている。

スキー修学旅行の短歌（一八八ページ）は生き生きとしていて、高校生達の感動や喜び、新しいものに触れての心の高まりがよくわかった。

スピーチの学習においても、生徒達が活発に活動していることがわかる。隣にすわっている人でも、その気持ちから分らないことが多い。友人が話すのを聞くことで、友人が何を考え、何に興味をもっているかが分かり、友人への自分の心が開いて行く。話すことだけでなく、個人が書いたものを皆で読むことにより、クラスや学年が融和的になり、思いやりが生まれ、帰属意識が高まり、集団がまとまっていくことになる。

I・Kさんという優れた言語使用者の作品に触れたのも驚きだった。語の意味の説明文や彼女が作った学校の広告コピー、さらに短歌作品などには、言葉に対しての彼女の新鮮な驚きがあふれ、言語感覚の鋭さ・洗練さが満ち満ちている。語りかける相手への

やさしさもあるようである。彼女の巧みな比喻などは、私など到底かなわないもので、言語による認識や思考力の高さが見られた。生徒の言語能力の高さと、集団の中の生徒の多様性に目を開かされた思いであった。（二二二ページ）

佐野孝氏の『生き方を見つめる作文指導』のすばらしさを、この書で知ったことも喜びであった。佐野氏の書の中の女生徒の作品「これまでのこと」を、私の授業でも生徒に読ませて感想文を書いてもらったが、生徒達が感動したことがよくわかった。

「藤野先生」の教材読解から表現への学習では、自分の考えを相対化し、狭い考えにとどらず、思考の発展が見られた感想文があった。

本書には、このように優れた内容が多いのだが、要約もある。

まず第一にテキストの問題である。生徒の作品を研究資料として活用しようとした時、使えない問題がある。生徒の作品は原文のままなのか、添削が入っているものなのか、わからないのである。どのように添削指導がされているのだろうか。誤字は直してあるのだろうか。「生徒の原文のまま」などの記述がほしい。

短歌の生徒作品を見ると、スキー修学旅行を詠んだような、実感に基づく生き生きした歌も多いが、言葉を安易に五七五七七に並べただけのような歌もあった。情と景を生き生きと表現するために、歌人は身を削るようにして一語を定める。茂吉も赤彦も、その他の歌人も呻吟している。このような苦勞をどう理解させるか。言葉への意識の厳しさをもたせるにはどうしたらよいのか。添削を重ねて気づかせていくしかないのだろうか。安易に言葉を羅

列する生徒も、ことはの厳しさを体感させる指導で、さらにもの見方を高めることができよう。一語を選択する苦勞を行えば行うほど、友人の苦心がわかり、生徒同士の交流が深まるのではないか。

国語の授業のめざすところは、一語一語の大切さを感じ取らせ、言語による認識を深めさせ、言語による思考力を増すことではないか。それがもたなくなつて心の交流が行われるのではないか。その厳しさがないと、心の交流も浅いものになるのではないだろうか。短歌の具体的指導について、もう少し書いてはしなかった。

一語を大切にする指導の必要性は、本書の他の指導でも感じた。一語一語の包含する厳密な意味をさまざまな場面で皆で徹底的に追求して、言葉一語について生徒たちの通理解を図れば、その共通理解をもとにしての議論が深まり、もって「主體交響」が深まるのではないか。具体例を挙げれば、「学力試験のみによる入学試験」の討議においても、「学力試験」という語の内実の追求が深くなされていたならば、生徒達の共通理解がさらに深まったであろう。生徒達の固定観念を打ち破るためにも、その前提として一つの語の内実を豊かにすることが重要であろう。本書では、「隱喩の創作」「○○の△をつくる」「レトリック感覚を利用して意見文を書く」などでそのことが図られているが、一語の意味の共有化の問題についてもっと書いてはしなかった。

本書への要望として、次のことがさらにある。指導の全体像がわかりにくい。あらゆる授業の資料がたくさん入っていて、逆に「主體交響」の一貫した指導の成果がわかりにくい点がある。

三年間の表現指導に基づくさまざまな生徒作品が示されるが、作品の作者がそのたびに異なるので、学年としての変容の様子や生徒個人の変容の過程もわかりにくい。提出物の提出状況、出さない生徒の指導の様子などもわかりにくい。生徒達が一年生から三年生にかけて言語能力が進歩していき、相互交流が深まっていくなのは大筋ではわかるのだが、多くの生徒の作品が登場し、前の指導で登場した生徒と違うので、その成長のあとがわかりにくいのである。少数の生徒の活動に絞って発言の逐語記録を示し、その生徒の成長のあとや、生徒同士の交流の記録を客観的に記述してもらったほうが、著者の指導の成果がよくわかり、研究書としてさらに優れたものになったのではないか。

また、言語による生徒の認識の過程や思考過程が客観的に詳しく記述されていないので、どのように言語認識を深め、言語思考活動を行っていたか、その過程がわかりにくい。作品の回し読みで生徒達がどのように変容したか、集団全体としてどのように思考が高まっていたかもわかりにくい。

これは、なるべく概観的に多くの生徒の様子を示そうとした本書の性格によるかもしれない。国語の授業やクラスの活動において、「表現活動」によって生徒同士が交流を進めていった、その交流の様を広く示そうとしたと思われる。三年間もち上がりで担当した学年の生徒達、その生徒達の高校生活の様子をできるだけ多くの人に知ってもらいたいという願い、このような気持ちで込めた書であろう。してみると、私の言っていることはないものか、だりということになるかもしれない。

私はこれまで多く出された国語教育の「実践報告」には、十分なものとあると思う。「言語認識力」や「言語思考力」育成の観点からの、学習者の言語活動についての客観的記述が少なく思うのである。国語教育の目標については、学習指導要領の記述も含めて「言語認識力」「言語思考力」が大きな問題になると思うのだが、「国語教育学」を学問とするためには、「言語認識力」や「言語思考力」の解明が欠かせないし、その考えに立つての生徒の言語活動の客観的記述の積み重ねが欠かせないと思うのだ。その点、本書は、研究書としては不満がある。

この書は生徒の作品資料が多く、テクストの問題はあるが、生徒の多様な言語活動が広く示されている。この書に示された生徒作品から様々なことが考えさせられる。主として学校生活における生徒達の考えていること、喜び・悲しみがわかるのである。一つの学校の一つの学年の生徒の中に、さまざまな学力の生徒がいて、様々な思いをしている。

国語科教育外のことも含めて、次のようなことが考えさせられる。現代の生徒達の短絡的発想や思考の範囲の狭さは何によるのか、そのために言語指導はどうあるべきか、生徒達の発想が社会の変革と結びつかなかつたり、親の仕事への思い・配慮がないのはなぜか、生徒達の「母語」とはどういうものか、生徒同士の言葉は通じているのか、孤立する生徒たちの真の原因は何か、国語教育の目標をどのように考えたらよいのか、著者の言う「主体交響」の他に、必要な指導方法に何があるか、等々多くのことを、この書から考えさせられるのだ。

教師が新しい指導を行つた時、その授業の感想を書いてもらうと、「楽しかった」「もう一度してほしい」などと生徒が書いてくれることが多い。これはなぜか。生徒たちは気持ちがやさしく、新しい試みをする教師の気持ちを汲み取ってくれるのだろう。そのほめ言葉を鵜呑みにすることは危険だが、先生が新しい指導を「わざわざ」「自分たちのために」してくれたことが嬉しいという気持ちもあるだろう。

本書でも、授業に対する生徒達の喜びにあふれた感想が載っていたが、生徒たちは実にうれしかったことであろう。個人が孤立しがちな、学校という「隔離された場所」にあって、自分たちの心を開き、友人との交流を図ってくれた著者の意欲的な指導は、思い出しでも実に嬉しかったことであろう。狭い範囲の中に孤立している生徒達のことを深い愛情から心配し、その閉塞された状況を、著者は国語教育の立場から打開しようとした。野村氏の意欲的な試みの連続を示したこの書は、これまでの国語教育を変えの一つの記念碑的な書となるであろうことは間違いない。

(一九九九年三月 大修館書店 B6判 一二五頁 一三〇〇円)
(都立南高等学校)